

■ 多摩川の名脇役

太古の多摩川に思いをはせて

まんようかひ
12. 万葉歌碑 (狛江市中和泉 4-14)

多摩川に さらす手作り さらさらに 何そこの児の こだ愛しき (万葉集巻 14 3373)

太古、飛鳥の頃に編まれた現存する日本最古の歌集、「万葉集」の一句が刻まれた「万葉歌碑」は、文明 2(1805)年、多摩川のほとりに建立されましたが、文政 12(1829)年の洪水で流されてしまいました。現在建っているのは大正 12(1923)年に再建されたものです。この歌碑の歴史を紐解くと、多摩川を愛し、この碑の建立に尽力を注いだたくさんの人々の姿が浮かび上がってきます。



(左から時計回りに) 万葉歌碑／松平定信の揮毫／羽場順承による碑／付近の「水神社」／六郷用水取水口と玉翠園 (写真-H17.1 撮影)

太古の「狛江郷」・――・――

「万葉歌碑」のある狛江市から上流の調布市にかけての大部分は、かつて「狛江郷」と呼ばれ、多摩川の雄大な流れと、国分寺崖線（ハケ）から湧き出る水に恵まれた豊かな地域でした。

古墳時代にあたる西暦 660 年頃、「唐（とう）」と「新羅（しんら）」によって、「百濟（くだら・ひやくさい）」「高句麗（こうくり）」が相次いで滅ぼされると、日本へ渡来してくる朝鮮半島の人々が増えました。渡来人達の多くは、現在の東京都・埼玉県・神奈川県を占めていた「武蔵国（むさしのくに）」に住み着き、古墳[*1]なども数多く残しました。



「高句麗」の別名を「高麗（こま・こうらい）」といい、「高麗（こま）の人々が住む入り江」という意味が転じて「狛江」という地名になったとも伝えられています。

また古代から多摩川流域では、麻や絹の生産が盛んで、奈良時代頃からは天皇に納める「調（みつぎ）の布」が生産されるようになりました。

「調布」もその生産地の一つで、市名以外でも「布田（ふだ）」「染地（そめち）」などの地名が現在も残り、布との深い関わりをうかがい知る事ができます。

衣叩き（きぬたたき） 古代の技術で織られた布は、糸が太くごわごわと硬かったため、多摩川の清流に布をさらしながら、「砧（きぬた）」という木槌でたたき「衣叩き」という作業をして、つやを出し、柔らかくしたといいます。記録によると江戸時代頃までは多摩川で布をさらし、衣叩きをしていたようで、多摩川にほど近い世田谷区砧の地名もここから来たものだと思います。



（絵：諸国六玉川）

初めの「万葉歌碑」 - . - . - . - . - . - . -

調布の地名の由来ともなる、調（みつぎ）の布を多摩川の清流にさらしている様子を詠った、万葉集巻 14 の東歌です。

〔原文〕

たまがわに さらすてづくり さらさらに なにそこのこの こだかなしき
多麻河泊爾 左良須弓豆久利 佐良左良爾 奈仁曾許能児能 己許太可奈之伎
多摩川に さらす手作り さらさらに 何そこの児の こだ^{かな}愛しき

〔訳〕 多摩川にさらさらと曝す（さらす）手作り（調布）のように、更に更にどうしてこの娘達はこんなに可愛いのだろう。

この歌が刻まれている「万葉歌碑」は、文化 2(1805)年、元土浦藩士の平井有三重威（ひらいゆうぞうとうい）が建立しました。場所は、猪方村半繩（現在の狛江市猪方 4）の多摩川のほとり、ちょうど昭和 49(1974)年 9 月 1 日に「狛江水害」で被害を受け、現在「多摩川決壊の碑[*2]」が建っている辺りだと思われます。

土浦藩（茨城県土浦市）出身の平井は、当時 70 歳を越えていましたが、猪方村の名主重八の家に身を寄せて手習師匠[*3]をしていました。江戸幕府の老中を勤めていた松平定信（まつだいらさだのぶ）を初め、数々の文化人たちと交流があった平井は、「日本六玉川（むたまがわ）」の一つ、武州（武蔵国）玉川に名所がないのを嘆き、万葉集に詠まれた句を刻んだ、石碑の建立を思い立ったのです。

「日本六玉川（むたまがわ）」とは・・・(1)滋賀県草

津市「野路の玉川」(2)宮城県塩竈市・多賀城市「野田

の玉川」(3)東京都調布市「調布（てづくり）の玉川」

(4)京都府綴喜郡井手町「井手の玉川」(5)大阪府高槻市

「三島の玉川」（別名「砧の玉川」）(6)和歌山県高野

「高野の玉川」の、日本に 6 か所ある玉川の事で、歌枕

としても和歌に度々引用されてきた地名です。また、

多摩川の名前の由来には諸説があり、その中の一

説によると、多摩川の礫（れき）の中に玉（玉石）を産したため「玉川」という名になったと言われています。六玉川のひとつ宮城県の「野田の玉川」も、かつて玉の産地だったそうです。



文明 2(1805)年、江戸の知人などに寄付をつのって歌碑を完成させた平井は、猪方村半繩を流れる多摩川の堤防のほとりに、水神社と共に歌碑を建立しました。当時建立された歌碑の揮毫[*4]は松平定信、碑陰記[*5]の撰文[*6]は白河藩の儒者広瀬典、書は大塚桂によるものだったそうです。

〔碑陰記・訳〕 日本で「玉川」と呼ばれる川は天下に全部で6つある。武蔵国にあるのはその1つである。しかし、水の道はしばしば変わってしまうので、現在訪ねてみても見つける事が出来ないのである。

平井董威が「調布の玉川」旧跡を考証探索して何年か経つが、最近これを認定し、我が老公（松平定信）にお願いして、その古歌一首を書いてもらい、石碑に刻んで、これを多摩郡猪方村に建てた。これから後は、古跡に腰を下ろし、立派な石と共に世間に知られていくだろう。

微（わずか）な事でも大事なことは世に紹介し、幽（かすか）な事でも鮮明にしていく事が、孔子が著したのものとも言われる「春秋」という歴史書の志である。董威はきっとこれに学んだのであろう。

言うまでもなく老公の書は、この証拠を後世に残す事となった。

*建立当時書かれた漢文を分かりやすく訳しているため、表現に差違がある場合があります。ご了承下さい。

文政2(1819)年1月、平井と名主重八は、江戸から松本幸四郎らを招いて多摩川の河原で歌舞伎を興行しました。しかし当時、江戸では人集めは禁止されていたため、重八は村追放に、平井は百日手鎖の上、井伊領（現在の世田谷区）に追放となり、狛江の隣村「駒井村」で亡くなったのです。

そして「万葉歌碑」建立から24年後の文政12(1829)年、多摩川が大洪水にみまわれて堤防が決壊、歌碑も行方不明になってしまいました。そのため残念ながら、当初建てられた歌碑の形や大きさ、建てられた正確な場所などは謎のままです。

「万葉歌碑」の再建――

時は移り大正時代。隠居後に「楽翁（らくおう）」と名を変えた松平定信を敬慕していた、三重県の羽場順承（はばじゅんしょう）は、楽翁の遺著や遺跡を追っていました。大正11(1922)年、羽場は旧（三重県）桑名藩士から、歌碑の拓本を手に入れました。しかし玉川碑がすでに失われていることを知り、当時猪方村長をしていた石井扇吉、郷土史家の石井正義などに協力を仰いで、旧歌碑の発掘を行いました。見つかることができませんでした。

歌碑の再建を計画した平井は、やはり楽翁を敬慕していた実業家の渋沢栄一[*7]に協力を依頼しました。大正11(1922)年7月、歌碑再建のための「玉川史蹟猶興会[*8]」を発足、8月には猪方村半繩の旧跡地が、東京府認定の史蹟になり、標識が立てられます。9月24日、渋沢や、東京府史蹟係の稲村坦元、国史学者の八代国治、郷土史家の石井正義らを講師とした「玉川史蹟講演会」が、「玉翠園（ぎよくすいえん）」内の林間学校で開かれました。

玉翠園（ぎょくすいえん）とは

明治 39(1906)年頃、当時の狛江村会議員・井上半三郎が、和泉塚上（いづみいりうえ・現在の中和泉町 4）の約二千坪の土地を開墾し、「井上公園」を造成しました。老松が茂り、眼下には多摩川が悠々と流れ、その向こうに富士山や、丹沢の山並みが遠望できる景勝地だったそうです。

大正 2(1913)年、その公園の中に建てられたのが料亭「玉翠園」です。屋形船を浮かべ、鮎料理を楽しむ客で賑わいましたが、戦況の悪化に加え、多摩川の汚染がひどくなり、昭和 14(1939)年に閉店しました。

公園内には、大正 10(1921)年、小学生のために宿泊施設を備えた林間学校も建てられ、地域の公民館のような役割も果たしていたそうです。



大正中期の船遊の様子です。

写真の女性は料亭の仲居さんたちです。流れの中程と違い、岸辺付近は流れが静かで浅底でした。

大正 12(1923)年 3 月、渋沢は財界に募った 2,150 円に、自らの寄付金 2,500 円と、玉川史蹟猶興会費を加え、6,000 円を超える資金を集めました。そして 8 月頃には、玉翠園前（現在地）に歌碑を再建、秋には除幕式を予定していましたが、9 月 1 日におきた関東大震災によって歌碑が倒れ、除幕式は延期になってしまいます。

しかし翌年、楽翁の命日にあたる 4 月 13 日には玉翠園で盛大な除幕式が行われました。

高さ 2.7m の堂々たる歌碑の揮毫は、楽翁の拓本を復刻、碑陰記は旧碑のものに合わせ、後半には渋沢の撰文・書が刻まれています。

〔碑陰記後半・訳〕 武蔵玉川の地は、いにしえより芋麻蚕糸[*9]に富んでいて、里人はこれを織り、玉川にさらして朝廷に献納していた。これが万葉集に、玉川にさらす手作りの歌を残した由縁である。文化年間（1804～1818 年）の初めに松平楽翁公が、里人の願いによって万葉集の歌を書し碑

を建てたが、文政 12(1829)年の洪水で堤防が決壊して、この歌碑が流されてしまってから、今まさに百年におよぶ。

狛江の里人、石井扇吉、石井正義、羽場順承などがこれを惜しみ、何回か発掘を試みたけが遂に見つけることが出来なかった。よって「玉川史蹟猶興会」を興て旧碑の拓本を模刻し、それをもってこの地を明らかに表す。

余が楽翁公に私淑していて名勝保存の志があるので、援助を請いてこの碑を建て、その事由を碑陰に記す。

考えてみると玉川の地は万葉の時（7 世紀後半～8 世紀後半）には、東に一つ川沿いの村があるだけだったが、皇都の東京に決められてから首都に近いこの土地では、冠や帽子、裾や履き物と、常に美しい山水の景色が、相映ず。

今、また永遠に変わらない石の碑を建てて、名高い老中（楽翁）故人の立派な功績を伝え、遠く奈良朝の昔の姿を懐かしむ。

これは、太平な時代の恩恵であろう。

この地でこの碑を見る者の心が動かされる事を願う。

大正 11 年 12 月 27 日 正三位勲一等子爵（しょうさんいくんいつとうしやく） 渋沢栄一 撰ならびに書

石工 吉沢耕石（よしざわこうせき）刻

*建立当時書かれた文を分かりやすく訳しているため、表現に差違がある場合があります。ご了承下さい。

さらにこの万葉歌碑の傍らに、もう一つひっそりと小さな碑が建っています。これは再建に尽力した羽場順承が記したものです。

〔傍らの碑・訳〕 これは、万葉歌碑を建てた玉川のその名所を未来永遠に伝える記として小松石に刻んだ言葉 である。後の楽しみで願う事は、千年後ここへ来てこの碑を見たいものである。大勢の子供 たちを引き連れて。

羽場順承 記す

*建立当時書かれた文を分かりやすく訳しているため、表現に差違がある場合があります。ご了承ください。

「万葉歌碑」は、大正 11(1922)年 8 月に指定されてから現在も「東京都指定旧跡玉川碑跡」として大切に残されています。羽場が傍らの碑に記したように、これから千年後も変わらず、太古多摩川で人々の営みや、名所 として詠われた多摩川の情景、そして多摩川を愛する人々の気持ちを証明する存在であり続ける事でしょう。

*1 古墳 (こふん)

- ・・・ 狛江市では、古墳時代中期頃「狛江百塚」と呼ばれるほど多くの古墳が構築された。現存するものは、兜塚古墳、経塚古墳、土屋塚古墳など 13 基。調布市の多摩川台公園内には亀甲山古墳がある。

*2 多摩川決壊の碑 (たまがわけっかいのひ)

- ・・・ 狛江水害の教訓を後世に残すために建てられた碑。

*3 手習師匠 (てならいししょう)

- ・・・ 江戸時代の教育施設。今で言う学校。「手習塾」とも呼ばれていました。「寺子屋」と同じですが、この呼び名は関西系のもの。

*4 揮毫 (きごう) ・・・ 書画をかく事。

*5 碑陰 (ひいん) ・・・ 石碑の背面。

*6 撰文 (せんぶん) ・・・ 文章をつくる事。

*7 渋沢栄一 (しぶさわえいいち)

- ・・・ 天保 11(1840)年 2 月 13 日～昭和 6(1931)年。武蔵国 (現在の埼玉県深谷市) 出身の実業家。第一国立銀行を設立した日本経済の父と呼ばれる。京浜工業地帯を作った浅野 総一郎とも関わりがあった。>

*8 玉川史蹟猶興会 (たまがわしせきゆうこうかい)

- ・・・ 顧問：渋沢栄一 (子爵)、宇佐見勝夫 (東京府知事)、秋本喜七 (衆議院議員)、宮城栄三郎 (北多摩郡長)、石井寅三 (府会議員) / 会長：石井扇吉 (狛江村長) / 副会長：石井正義 (郡会議員) / 理事：羽場順承 (四賢同学人)、井上半三郎 (村会議員)、本橋久八 (村会議員) / 評議員：萩本貞輔 (調布町長)、安藤兵庫 (砧村 長)、岩本作太郎 (千歳村長)、富沢晴明 (神代村村長)、飯田藤蔵 (前郡会議員)、荒井太四郎 (狛江村助役)

*9 苧麻 (ちょま) 蚕糸 (さんし)

- ・・・ 苧麻 (チョマ) とは、茎を蒸して剥がし繊維を採って織物に利用した植物「カラムシ」の事。蚕糸 (さんし) とは蚕の繭から取った糸の事。